

資本論の研究

上野 皓 司 著

風 間 書 房

昭和59年 8 月20日 印刷
昭和59年 8 月31日 発行

(検印省略)

資 本 論 の 研 究

定価 3,500 円

著 者 上 野 皓 司

発行者 風 間 務

印刷者 小 川 光 二

発行所 株式会社 風 間 書 房

101 東京都千代田区神田神保町 1 の34番地
電話 (291) 5729番 振替東京1-1853番

(昭文堂印刷・矢嶋製本)

ISBN4-7599-0608-8

ま え が き

『資本論』の第1部の初版が刊行されてからすでに百十数年を経過している。しかしこの著書に関する研究は今日も絶えることなく続けられている。その原因はおそらく『資本論』に盛り込まれている興味深い現実描写と、その現実の的確な分析によるものであろう。それは読むたびごとに読者に新鮮な感動と深い示唆を与えてくれるように思われる。実はこの書物に関する研究がすでに数え上げることも不可能なほどに多数出版されていることを知りながら、あえてこのような小著を刊行しようという気持ちになったのも以上のような理由によっている。

『資本論』は多様な側面を有している。この全容を把握するためには長い歳月を要することであろう。そこで今回はまず比較的明瞭に示されている経済分析の方法や概念について整理することを試みている。ただ対象の選択は、著者の興味に基づいているためにかなり恣意的なものであるかもしれない。

研究の方法としては、最初に『資本論』の対象箇所を出来るだけ忠実に解釈し、直接関連すると思われる記述部分を引用として掲げている。次にこれらの項目について内容をより明確にするために図式的に描写している。最後に個々の概念の間の関連を記号によって表現している。これは内容の明瞭化と同時に実証分析などのさいの便宜をも考えたためである。

本書を刊行するにさいしては多数の方々にお世話になりました。特に和歌山大学の宮本義男先生には研究上の指導から出版に至るまであらゆる面でお世話を頂きました。先生のご尽力なくしては本書の完成はありえなかったと思われます。先生をはじめ多数の方々に心からお礼を申し上げます。また出版を快くお引き受け下さった風間書房社長の風間務氏、編集や校正その他でお世話を頂いた風間書房の村田俊宏氏に心から謝意を表します。

昭和 59 年 6 月

上 野 皓 司

目 次

まえがき

第1章	商品の価値	1
第1節	商品の二要因	1
第2節	価値形態	23
第2章	労働力の価値と剰余価値	41
第1節	労働力の価値と労働手段	41
第2節	不変資本、可変資本と剰余価値	57
第3節	労働生産力の変動	77
第4節	生産力増大の形態	88
第5節	生産力と自然条件	112
第6節	労働力の価値と剰余価値の比率の変動	117
第3章	資本の蓄積過程	126
第1節	資本の蓄積	126
第2節	蓄積に伴う一般的法則	132
第4章	資本の循環と回転	149
第1節	資本の循環	149
第2節	流通時間と流通費	158
第3節	資本の回転	165
第5章	社会的総資本の再生産	169
第1節	単純再生産	169
第2節	拡大再生産	179

第6章 生産価格と一般的利潤率	189
第1節 費用価格と利潤	189
第2節 生産価格と一般的利潤率	195
第3節 市場価格と市場価値	203
第4節 生産価格の変動	210
第7章 利潤率の傾向的低下の法則	216
第1節 利潤率の傾向的低下の法則	216
第2節 反対に作用する諸原因	222
参考文献	231
索引	235

第1章 商品の価値

第1節 商品の二要因

1 使用価値と価値

《商品》

マルクスは『資本論』第1部第1編第1章商品の項をつぎのような記述ではじめている。

資本主義的生産様式 Kapitalistische Produktionsweise が支配的に行なわれる社会の富は、一つの「巨大な商品の集積」ungeheure Warensammlung として現われ、個々の商品は、この富の基本的形態 Elementarform として現象する。それゆえわれわれの研究は商品の分析 Analyse der Ware をもって始まる¹⁾。

アダム・スミスが経済学研究の目標を「国家の富」と考え、その研究のための出発点を富の構成要素としての商品に求めたのと同様に、マルクスも資本主義経済を分析するための出発点を「富の基本的形態」としての商品に求めている。すなわち国民経済の基礎はその社会の富にあり、その富を研究することが国民経済の実体を解明する糸口であるが、その富は「個々の商品」の「巨大な集積」より成り立っている。それゆえ資本主義経済を解明するための第一歩は、社会の富の最小単位である「商品」の分析をもって始められることになる。

《商品体》

商品の本質を明らかにするために、まず商品の物質的特質を説明している。

ある物の有用性 *Nützlichkeit* は、その物に使用価値 *Gebrauchswert* を付与する。しかしこの有用性は空中に浮んではいけない。それは商品体 *Waren Körpers* の属性によって制約されており、商品体なしには存在しない。それゆえ鉄や小麦やダイヤモンドなどのような商品体そのものが、使用価値または財 *Gut* である²⁾。

すなわちあらゆる商品は必ずある種の「有用性」をもっている。その有用性が商品を所有することに意義を与え、その商品を使用することに対し価値を付与するのであるが、その有用性も商品の物質的媒体なしには存在しえない。すなわち商品は、鉄や小麦やダイヤモンドなどのような一定の有用性をそなえた物質であり、それゆえある種の使用価値を有する「財」である。マルクスはこのような商品の物質的特質を明確にするために、特に「商品体」とよんでいる。

《使用価値の量的尺度》

商品体は有用性を備えた財であるが、その使用価値は質と量の二面をもっている。鉄、小麦、ダイヤモンドといった財の区別は質的な差異をあらわしており、何トンの鉄、何クォーターの小麦、何カラットのダイヤモンドという場合は量的大きさをあらわしている。この使用価値についてはつぎのように述べられている。

使用価値の考察にさいしては、何ダースの時計、何エレの亜麻布、何トンの鉄というようにつねにそれらの量的な規定性 *quantitative Bestimmtheit* が前提される。……使用価値は、使用または消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどうあろうと富の素材的内容をなす³⁾。

《交換価値》

商品は各々異なる有用性を備え、使用価値として質、量ともに差異を有し

ている。しかしこの相異なる商品が相互に何らかの基準に従って交換されている。すなわち使用価値としては質量ともに異なる商品が他の尺度によってその比率を定められ、相互に交換されているのである。この比率を決定する尺度が「交換価値」である。

交換価値 Tauschwert は、まず第一に、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係 quantitative Verhältnis, すなわち比率 Proportion として現われる。それは時と所とともに絶えず変動する関係である。……使用価値としては、諸商品は、なによりもまず相異なる質 verschiedenner Qualität であるが、交換価値としては、それらは、相異なる量 verschiedenner Quantität でしかありえないのであり、したがってわずかの使用価値も含まない⁴⁾。

すなわち商品体は使用価値と交換価値の両者を備えており、使用価値としては質と量の両面を有しているが、交換価値としては質的差異は存在せず、ただ量的差異のみである。この交換価値が異なる商品においてすべて共通の量的尺度によって測られるところに商品交換の可能性が生まれることになる。ではその交換の共通的尺度とは何であろうか。すなわち交換価値の実体はいかなるものであろうか。

《価値と労働》

マルクスは商品の交換価値の実体を「価値」とよび、価値を「労働」に求めている。すなわちつぎのような説明をおこなっている。

商品体の使用価値を見ないことにすれば、それに残るものは、もはや労働生産物だという属性だけである。……それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物ではない。……労働の相異なる具体的形態も消え去り、それらはもはやたがいに区別されることなく、すべてのこらず、同じ人間労働に、すなわち抽象的人間労働 abstrakt menschliche Arbeit に還元されている⁵⁾。

ここで商品体は使用価値と交換価値の両者を備えているという規定から、商品体は使用価値であるとともに労働生産物であるという説明に移行している。そして生産物を生み出す労働は指物労働や建築労働といった一定の目的や有用性を備えた労働ではなく、それらの労働の「具体的形態」を排除した「同等な人間労働」とであるとされる。すなわちすべての労働はたがいに無差別な、共通の尺度によって測られうる「抽象的人間労働」に還元され、それが価値の実体を構成する。それゆえ

ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからに他ならない⁶⁾。

すなわち商品とは一方では有用性に基づく使用価値を、他方では労働生産物であるという属性による価値を有することになる。ではこの価値の量的な尺度はいかなるものであろうか。

価値の大きさはどのようにして計られるのか。それに含まれている「価値を形成する実体」の量、すなわち労働の分量によってである。労働の量は、その継続時間で計られ、労働時間はまた、時間 *Stunde* や日 *Tag* などのような一定の時間部分をその度量基準にしている⁷⁾。

価値の量的大きさが労働の分量によって計られるとすれば、労働の量は何らかの尺度によって計られねばならない。この尺度が労働の長さであり、その具体的測定単位は、時間、日などである。すなわち労働時間何時間、労働日数何日といった分量で価値が示される。

《社会的な平均労働力》

商品の価値を決定するものは労働の分量であるが、労働には様々な種類があり、同一労働者の労働でも異なる商品の生産のために費やされる場合があり、また異なる労働者による同一商品の生産や、異種類の商品の生産がおこなわれている。これらの労働が同一単位で測定され、共通の分量として評価されるためには、すべての労働が共通単位に還元されなければならない。こ

のあらゆる労働の共通単位への還元は、個人的労働力の社会的労働力としての評価によってなされる。

価値の実体をなす労働は、同一な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の価値で表される社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成りたつとはいえ、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされる。これらの個別的な労働力は、いずれもそれが社会的な平均労働力という性格をもち、このような社会的な平均労働力として作用し、したがってまた一商品の生産においても平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間を必要とする⁸⁾。

個々の商品生産に費やされる労働は労働者個人の体力や能力の差異により様々な強度や形態をもっている。この個々の労働は、商品交換の過程で社会的な評価をうけ、平均労働力以上の価値を有する労働は、同一時間労働でもより長い時間の労働として計算され、平均以下の評価しかえられない労働は、同一時間労働でもより短い時間の労働として測られることになる。そしてすべての個々の労働は社会的な共通尺度によって同一の単位価値を有する労働時間に還元されることになる。すなわちある特定の商品は、いかなる個人的労働量が費やされようと、その価値は「社会的、平均的に必要な労働時間」によって決定されることになり、その個人的労働は「社会的な平均労働力」という基準によって評価をうけることになる。

《社会的に必要な労働時間》

個々の商品の「社会的に必要な労働時間」についてつぎのような説明がなされている。

社会的に必要な労働時間 *Gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit* とは、現存の社会的に標準的な生産諸条件 *Produktionsbedingung* と労働の熟練 *Geschick* および強度 *Intensität* の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である⁹⁾。

商品生産のための条件はここで二つに分類されている。第1は労働以外の生産条件に関するものであり、第2は労働力に関連するものである。第1の条件は生産設備や原料、燃料などの労働の生産力を助成する手段であり、生産物の数量や品質に大きな影響をおよぼす要因である。もし同一労働力が投入されたとしても、社会的平均水準以上の良好な生産設備を有する生産の場合では、社会的に必要な労働時間以下の労働で必要時間に等しい生産物を生み出すであろうし、標準以下の条件のもとでは、必要な労働時間以上の労働を要するであろう。また第2の条件については、社会的平均水準の生産条件のもとでも、平均以上の熟練や強度を有する労働力の場合、同一生産物を生産するために社会的に必要な労働時間以下で十分であろうし、平均以下の労働力の場合は、必要な労働時間以上の労働を要するであろう。それゆえ商品の価値は生産諸条件と労働力の質について一定の平均的条件を前提にして測られることになる。すなわち

ある使用価値の価値の大きさを規定するものは、社会的に必要な労働の量、またはその使用価値の生産のために社会的に必要な労働時間にほかならない¹⁰⁾。

という場合、生産諸条件と労働力について「社会的、平均的」水準がまず想定されているということになる。

《商品生産のための労働時間の変動》

ある商品の価値は平均的な生産諸条件のもとで平均的な熟練と強度を有する労働者による労働時間によって決められる。しかし社会の進歩や発展によって生産諸条件や労働者の熟練度等がたえず変化してゆく。一定量の商品を生産するために社会的に必要な労働時間はそれらの変化にともなって変動してゆくことになる。すなわち

ある商品の生産に必要な労働時間が不変であれば、その商品の価値の大きさは不変であろう。しかし前者は労働の生産力 *Produktivkraft der*

Arbeit におけるあらゆる変動につれて変動する¹¹⁾。

労働1単位で計られた生産物の量によって「労働の生産力」を表し、その変化を「労働生産力の変動」とよんでいるが、労働の生産力についてつぎのように述べられている。

労働の生産力は、多様な事情によって規定されており、なかでも特に労働者の熟練の平均度、科学およびその技術的な応用可能性の発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力によって、また自然諸関係によって規定されている¹²⁾。

労働の生産力は、熟練や強度などの労働者自身に関連するものと、科学技術の水準、生産過程の結合形態、直接的生産手段の状況、生産対象の性状などの生産の諸条件に関するもの、および地味、天候、水力などの自然状況に関するものとがある。これらは一体となってその場の労働の生産力を決定してゆくことになるが、特に自然的状況が強く影響を及ぼす場合についてつぎのような例がのべられている。

同量の労働が、たとえば豊作のときには8ブッシェルの小麦で表され、凶作のときにはただ4ブッシェルの小麦で表される。同じ量の労働が、豊かな鉱山では貧しい鉱山におけるよりも、より多くの金属を産出する¹³⁾。

商品の価値は社会的に必要な労働時間によって決められるが、その労働時間は生産条件全般の変化に従って変動してゆく。それゆえ商品の価値を歴史的な変化の中でとらえようとするさいには、つねに社会的な生産力の把握が必要であるといえる。

《使用価値のみの財》

商品は使用価値と価値の両者を含む財である。では使用価値のみの財は存在するのであろうか。

ある物は、価値であることなしに使用価値でありうる。人間にとってそ

の物の効用が労働によって媒介されていない場合にはそうである。たとえば空気、処女地、自然の草原、野生の樹木などがそれである¹⁴⁾。

すなわち使用価値とは人々にとっての有用性をあらわしているが、もしある財が有用性を備えており、しかも労働をとまわずに自然から与えられるならば、それは「使用価値のみの財」である。ただそれらの財は価値を有していないために「無償の財」であり、もし商品となるならば「無償の商品」あるいは「価値ゼロの商品」となる。

《商品であることなしに価値および使用価値を備えた財》

商品は使用価値と価値とを備えた財である。しかし使用価値と価値とをもつ財がすべて商品であるとはいえない。すなわち商品であるためには相互の交換が前提されていなければならない。その財の使用価値には、他人のための効用がふくまれていなければならない。すなわち自己の使用のために労働を投入して生み出す財や、他人に評価されることのない自己の好みによって作り出す財は、価値と使用価値を有しているにもかかわらず商品とはなりえない。すなわち

ある物は、商品であることなしに有用であり、また人間の労働の生産物でありうる。自分の生産物によって自分じしんの欲望をみたす人は、使用価値を創造するが、商品を創造することはない。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけではなく、他人のための使用価値を、社会的な使用価値 *gesellschaftlichen Gebrauchswert* を生産しなければならない¹⁵⁾。

商品であるためには使用価値を有するだけではなく、「他人のための使用価値」を、すなわち「社会的な使用価値」を備えていなければならない。

《価値のみの財は存在しない》

商品は使用価値と価値を有する財である。しかし使用価値と価値を有する

が商品ではない財も存在する。上記の「自給の財」である。使用価値のみの財も存在する。空気、水、原生林などの自然の財である。では価値のみの財、あるいは価値のみの商品は存在するのであろうか。

いかなる物も、使用対象であることなしには価値ではありえない。物が無用であればそれに含まれている労働も無用であり、労働としては計算されず、したがって価値をも形成しない¹⁶⁾。

価値を単に労働投入のみによって定義すれば、労働を要した使用価値を有しない財が存在する。無用な労働生産物がそれである。しかしマルクスの価値は、「使用価値を生み出す労働」と定義されている。それゆえ無意味な労働は価値としては計算されず、価値のみの財、価値のみの商品は存在しないことになる。マルクスの価値の定義は、使用価値を備えた財の量と結びついており、使用価値を排除した価値の存在は考えられない。労働生産力の説明のさいにみられるように、まず使用価値を有する財の量が想定され、つづいて価値が測定されることになる。価値は使用価値に媒介されてはじめて意味をもつことになる¹⁷⁾。

2 商品で表示される労働の性格

《有用労働》

商品の分析では、商品に体化された労働が商品体を通してどのような社会的評価を受けているかが、使用価値と価値という基準によって説明されている。いま労働生産物という観点から、労働そのものへ、すなわち商品や財を生み出す主体としての労働の性質や形態に目がむけられる。まず使用価値と労働の関係についてつぎのように述べられている。

上衣は、一つの特殊な欲望を満たす使用価値である。それを作りだすためには、ある一定種類の生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業様式、対象、手段、および結果によって規定されている。このようにその有用性がその生産物の使用価値において、またはその生産物

が使用価値であるということにおいて表される労働を、われわれは簡単に有用労働 *nützliche Arbeit* と名づける¹⁸⁾。

労働生産物の有用性は、それを作り出す労働の種類によって決められる。いかなる物を作り出すかという目的が定められ、必要な原料や燃料が準備され、道具や機械に補助されつつ、一定の作業過程が進行してゆく。この過程でなされる労働が商品のある種の使用価値と価値を生み出してゆくが、この使用価値との関連で労働をみる場合「有用労働」と定義されることになる。

《労働の相異なる形態》

有用労働はその作り出す使用価値の種類によって様々に分類されうる。使用価値が異なればそれを作り出す労働の過程や様式もおのずから異なるが、このような労働の差異を「労働力を支出するための相異なる形態」とよんでいる。すなわち

裁縫と織物とは、質的に相異なる生産活動であるとはいえ、いずれも人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味でいずれも人間労働である。それらは人間の労働力を支出するための二つの相異なる形態にはかならない¹⁹⁾。

《単純労働と複雑労働》

社会的、平均的労働を定義するさいに、労働の条件として平均的な強度や熟練が前提されているが、労働力の支出に関連してさらに他の要因が説明されている。すなわち「単純労働」と「複雑労働」である。

単純な平均労働 *einfache Durchschnittsarbeit* そのものは、国が違い、文化時代が異なればその性格を変えるが、ある当面の社会では与えられている。複雑労働 *kompliziertere Arbeit* は、ただ累乗された *potenzierte*、あるいは数倍された *vielmehr multiplizierte* 単純労働としてのみ意義をもつのであり、したがってある少量の複雑労働はより多量の単